

喧嘩の仲裁

平成21年10月6日

これは、2004年豪州・ペンリス市春ゆめの大自然交流合宿中の4月3日、ペンリス市のネピアン川沿いのテンチ・リザーブで、藤枝からのリーダー、スタッフ15名が手伝う中、36名の参加者がそのBuddy（ペア）と一緒にバーベキューをした時の話である。実にジャンボなソーセージと、これまたジャンボなパンと肉など、ペンリス市国際友好協会会員の皆様が全て準備して頂き、みんなお腹一杯になってくつろいでいた時だった。川沿いの芝生の上で、小学4年生のM君と同じく4年生のR君がプロレスごっこを始めた。私は150m位離れたところからその様子を眺めていた。R君がM君の頭を腕で抱え、倒れ込んだ。ヘッドロックをかけたのだ。その瞬間、ホントに偶然にもR君の腕がM君の首に入ってしまった。苦しがるM君に気づかず、R君は倒れながらグイッと腕を締め始めた。私はこれとは駆けて行こうとしたら、M君は堪らず空いてる手でR君の頭を思いきり殴った。R君の腕はずれ、事なきを得た。それからR君は「なにおー！」と、M君に襲いかかった。私の近くにいたリーダー達数人が気づいて駆けつけようとしたが、私は制した。というのは、すぐ近くにいたダニエラ（米国出身、20代のALT）がじっとその様子を見ていたからだ。様々な野外活動指導の経験を持ち、ライフセーバーの資格も持つタフな彼女の対応を見たかった。ダニエラも私が見ているのを知っていた。取っ組み合い、殴り合いの喧嘩になったが、すぐお互いに泣き始め、口喧嘩になった。そこで、ダニエラが二人の間に入り、話し合いを始めた。離れていたため、私にはその会話ははっきり聞こえなかったが、程なくして二人はお互いに謝り合い、握手して別れた。

ダニエラが手を振りニコニコしながら私のところに来た。話はこうだった。ダニエラは先ず二人を落ち着かせ、お互いに言い分を話させた。そうしたら、R君が「腕が首に入ってたんなら、そう言えよ。」と言うや、M君が「言えたら、お前を殴らんよ。」と言い返した。「そうだよね、M君は首が絞められたら声も出せないよね。でも、R君もプロレスのつもりで遊んでたから、首に入っていたとは気づかなかったんだね。これはお互い様なんで、どうお互いに謝れる？」とダニエラが言うと、お互いに頷いたと言う。それで、お互いに握手して終わった。

大きな怪我は避けなければならないが、多少のすり傷や少し腫れる程度は勉強だを思っ
て、喧嘩はお互いに納得するまでやらせばいいと思う。そうすれば、殴る痛さも覚え、手加減も覚える。大事なのもう一つ。なぜ殴ったのか、なぜ殴られたのか、即ち、なぜ喧嘩になったかを分からせ、お互いに自分の非を謝ることを教えることだと思う。そして、最後は握手だ。ダニエラはそのことを見事に実現してくれた。